

# 障がい者の衣服の研究

## A STUDY OF CLOTHES FOR THE PHYSICALLY CHALLENGED

小山京子

Kyoko KOYAMA

### 1、緒言

市場には若者をターゲットとした数多くのファッション雑誌や衣料が出回り、価格もファストファッションに代表されるように、比較的安価で販売されている。しかしながら、何らかの障がいがあるために、これらの衣服を着用できない人がいることは大変残念なことである。

筆者は 15 年前から、障がいがあるために希望する衣服を着用することをあきらめていた人たちが、自らデザインし、それらを着用することによって、地域社会の活動等に積極的に参加できるような衣服を研究し、製作してきた。

そのような中、本学と津山工業高等専門学校は平成 21 年 7 月包括連携協定を結び、これによって教育と研究の連携を図る交換会が持たれた。その会での話し合いにおいて、1 年生 A 君（筋ジストロフィー）の衣服を研究し、製作を行うこととなった。

### 2、これまでの障がい者衣服の取り組み

筆者がこれまでに取り組んだ障がい者の衣服に関しては、以下の通りである。

- ・平成 8 年 10 月 美作町（現美作市）  
高齢者・障がい者のファッションショーを行う。
- ・平成 14 年 9～10 月 東京都飯田橋福祉会館  
東京都高齢者研究・福祉振興財団が開催した  
「身体機能障がいのための衣服講習会」（7 回）を受け、障がい者の衣服製作と発表を行う。
- ・平成 15 年 12 月 障がい者支援施設「みすず荘」  
クリスマス会においてファッションショーを行う。
- ・平成 20 年 6 月 倉敷芸文館  
「Chair Walker ファッションショー」  
に参加する。
- ・その後、車いす使用の女子高校生に衣服を製作する。

### 3、方法

A 君の状況は、小学校では立ってトイレに行くことができていたが、中学校では前中心に長いファスナーをつけるようになった。現在は全介助が必要である。

多くの高専生は、1 年から 3 年までは学生服を着用しているが、A 君は中学時のものを、近くの衣料品店で直してもらって着用している。また、地域で電動車いすサッカーチームに所属しており、主に月 2 回の練習に参加している。日常の衣服は子供用サイズの 150 を着用していて、ファッションにはほとんど関心がない。

そこで、毎日着用している衣服の中で不便を感じているものをあげてもらい、それらを改良することとした。

### 4、結果

毎日車いすを使用している生活の中で、一番の問題は上衣より下衣のパンツにあるということで、今回はパンツの改良を行うこととした。

（1）ファスナーとウエストの改良

- ・市販のポリエステル 100%、裏起毛、サイズ 150 のズボン（ジャージ風）に、前中心に 22cm のファスナーをつける。
- ・ウエストゴムがきついということで、ゴムをほどき、前中心で 2cm 下げ、幅 0.6cm、長さ 60cm ゴムを 1 本入れる。  
その写真を図 1 に示す。



図1 ファスナーとウエストの改良

着用後の感想として、「ウエストのゴムがゆるくなり、気持ちよかった」、「車いすサッカー用のジャージのゴムも直してもらえないか」と、改良品への評価が高く、次に車いすサッカー用のジャージを改良することとした。

#### (2) 車いすサッカー用ジャージの改良

- ・大人用 S サイズのため全体に大きすぎ、脇で前後を 2.5cm ずつ細くし、後ろ中心で 2cm 小さくする。
- ・股上も 35cm と深すぎるため、前中心で 5cm、後ろ中心で 2cm 下げる。
- ・ウエストゴムを取り除き前回同様のゴムを入れる。
- ・左右前の中心を 28.5cm 明けてファスナーをつける。その写真を図 2 に示す。



図2 車いすサッカー用ジャージの改良

#### (3) 夏用のハーフパンツの改良

- ・ポケット口を縫い、内側の袋布も取る。
- ・左右前の中心を 30cm 明け、ファスナーをつける。その写真を図 3 に示す。



図3 夏用ハーフパンツの改良

## 5、まとめ

障がいがあっても、着やすく、市販されているものと同じような衣服が着てみたいという人たちに対してれまでに少しではあるがその希望を叶えてきた。

今回、毎年病気の症状が重くなり、昨年までできていたことが不可能となっている男子高専生を対象として、着やすい衣服の研究を行ってきた結果、次のような知見が得られた。

- (1) ファッションにあまり興味のない男子高校生ではあるが、ファスナーやウエストゴムの改良により、着脱のしやすさを感じてくれたようである。
- (2) 一日のほとんどを車いすの上で過ごす人たちにとって、着用している本人は勿論、介助している人にも、特殊な衣服ではなくて、着脱しやすい衣服が必要である。
- (3) 障がいのある人たちのほとんどはその障がいや症状が違っているため、市販されている衣服をそのまま着用することはやむを得ないが、少し手を加えるだけで、着脱がしやすくなる。

A 君は現在 3 年生である。今後、よりはきやすく、楽しく着用してもらえるジーンズの研究を目指していた矢先、体調不良で学校を休むようになった。体調が良くなることを祈りつつ、回復すれば少しでもファッションに目覚めてもらえるように、着やすくかっこ良い衣服を研究していきたいと考えている。

また、所属しているサッカーチーム（岡山ヴィゴール）の人たちにも、希望する衣服が提供できたら良いと思っている。